



# OVERSEAS

## Kingdom of Bhutan

— ブータン王国 —

### 海外事情



## ブータン国にて



**伊藤 毅** ITO Tsuyoshi  
株式会社建設技研インターナショナル/環境部/技師長

### ブータンという国

ブータンはヒマラヤ山脈に連なる南斜面にあり、インドと中国の2大国に挟まれた小さな王国です。人口はわずか80万弱です。現地空港に早朝着いた後、丸一日かけて現場に行く車窓の光景(写真1)と首都からわずか1kmで始まる急峻な斜面の繰り返し、そして少ない集落を見たときに人口の少なさを実感しました。標高約2,400mに位置する、ブータン第1の都市となる首都ティンブーです。人口は10万に達しておらず、日本の村のようです。また、国土面積は日本の九州よりやや大きい約38,400km<sup>2</sup>です。

現場までの道路はすべて国道で、地図には一部はHighwayと書かれていましたが、我々がイメージするHighwayは到着直前の約3kmだけでした。それ以外に舗装されていた区間は半分にも満たず、標高800~3,000mのアッ

ブダウンを繰り返す幅が狭い峠道の連続でした。

ティンブーでは12月頃になると雪が積もり、初降雪日は学校も役所も休みになります。その日はブータン国自治省が祝日として発表するので、学校や役所に行った人も戻ってきます(写真2)。ブータン人は雪を

神聖なものとして捉え、冬の到来で今年も雪が降り、天候が順調に廻っていることへ感謝の意味を込めて祝日にするようです。初雪を祝うのは理解できますが、祝日にまでしてしまうのはブータンらしいと思います。



写真1 現場に行く途中



写真2 初降雪日のティンブー

### ブータンの目指すもの

ブータンといえば「幸せの国」と、日本人だけでなく世界の多くの人々がイメージしているようです。このようにブータンが注目を浴びるようになったきっかけは、かなり前に遡ります。イケメンで有名な若い今の国王の父ジグメ・シンゲ・ワンチュク第4代国王が、1976年にスリランカの首都コロンボで開かれた第5回非同盟諸国首脳会議の記者会見で“Gross National Happiness is more important than Gross National Product”と語ったことに端を発しています。「経済発展はブータン国の究極の目的ではなく、GNH(国民総幸福)の向上こそがブータンの目指すことである」と世界に向けてメッセージを発しました。当時は国王も即位後間もない21歳の最年少国家元首であったためか、GNHはきれいごとの理想論としかみなされなかったようです。

2006年になってイギリスのレスター大学の研究者が、当時はかなり抽象的な概念だったこのGNHの視点から「世界幸福地図」を作成しました。これによれば、178ヶ国中の上位をデンマークやスイス等の西欧諸国が占め、ブータンがアジアで唯一10位以内の8位に入りました。ちなみに日本は90位でした。

一方で1980年代以降、途上国でも経済発展に伴う様々な問題が顕在化してきたことに伴って、このGNHが注目されてくるようになりました。1981年には元世界銀行の経済学者が「持続可能経済的厚生福祉指数」と呼ばれる指標、要するに家庭の消費財支出を出発点として無報酬の家事の価値を加え、公害等の社会的費用を差し引いたものを提唱し、この流れから「グリーン経済」等が最近注目されてきているのかもしれない。

GNHのその後とはというと、ブータ

ン国の2013~2018年までの第11次5ヶ年計画には、通常の経済指標とは別にGNHの運用に向けてという項目があります。2010年の調査結果では、健康、時間的ゆとり、教育、文化的多様性、グッドガバナンス、コミュニティの活性度、生態的多様性、生活水準というような合計124の項目で、全国20県毎のGNH指標も記述されています。GNHが今後どのように実際に運用されていくかに注目したいと思います。「発展とは何なのか」を考える時の代替尺度になるかもしれません。

### バサカ工業団地

今回の仕事は日本のODA事業として、ブータン国南部の経済特区開発(工業団地建設)における環境配慮に係る技術支援でした。環境社会影響評価に関する世界基準とされている世銀セーフガード政策とこれに準拠しているJICA環境社





写真3 パサカ工業団地

会配慮ガイドラインに基づく環境影響評価となるように、ブータン国の関連機関とブータン国のインフラ整備全般を扱う半官半民の事業実施機関（DHI）職員への技術支援をすることが主な目的でした。

調査団員は、私と産業廃棄物を専門とする他社の方の2名でした。2015年には産業廃棄物に関して、既に操業している南西部地域のインドとの国境沿いのパサカ工業団地に

おいて、産業廃棄物処理・リサイクルの実態把握とその課題改善に関する提言を行いました。このパサカ工業団地では「幸せの国」に似つかわしくない程、公害問題が顕在化しています。特に、化学工場から排出される窒素酸化物、イオウ酸化物、PM等の汚染物質は、1960年代の日本の公害を超えるような状況です（写真3）。このような参考となる地域へも現地踏査やヒアリングに行き

ました。

### 環境影響評価

今回の仕事は、南部のインドとの国境からわずか3kmほど北に位置する平坦な亜熱帯地域が対象です。経済特区開発が予定されている南西の入口付近には小さな店（写真4）があります。その近くにある村の伝統的な寺の前に座って、地元の方に話を聞いたりもしました（写真5）。

2013年10月から約60日間の1回目の現地調査では、ブータン側による環境調査が既に開始されていました。環境調査に取り組んでいたのはインド人の民間コンサルタントでした。この方とDHI職員とともに現地踏査を実施し、『JICA環境社会配慮ガイドライン』に則った環境影響評価報告書（案）を作成しました。2014年2月から約45日間の2回目の現地調査では、ブータン国の環境影響調査の審査機関でもある国家環境委員会（NEC）からの環境影響評価報告書（案）に関するコメントも踏まえて、追加の協働作業を行いました。

また、DHI・NECの職員やブータン国工業局の職員などを対象に、



写真4 経済特区南西入口付近の小さな店



写真5 村の伝統的な寺

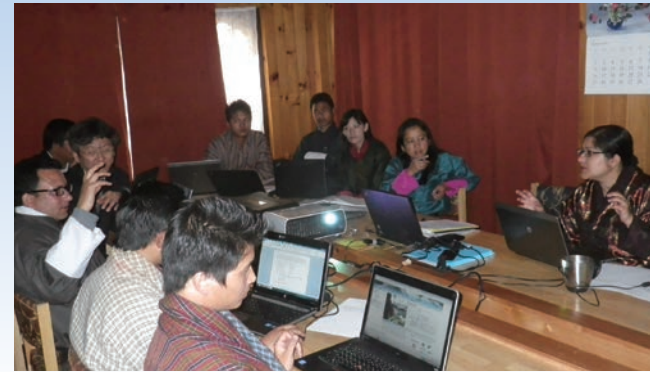


写真6 技術セミナー



写真7 技術セミナーでの議論

経済特区開発やインフラ整備に係る環境影響評価、環境配慮に関するタイ・ベトナム・東南アジア諸国・日本の好事例の紹介を主な目的とした技術セミナーをティンパーで開催しました（写真6）。セミナーでは参加職員によるブータン国の環境社会配慮の現状とその課題の発表を題材に「環境配慮型工業団地を目指すために、今現地で出来ることは何か」を議論しました（写真7）。

### ブータンの人々

現地でのフィールド調査以外にもDHI事務所内で、職員とデスクワークやヒアリングをしていました。時々、職員とブータンスタイルのティータイムを取りました（写真8）。ブータンで唯一都会といえるティンパーでも、このようなティータイムは今でも毎日の習慣として残っているようです。ブータンの人々は、環境調査のようなフィールドに行く時以外、女性は「キラ」、男性は「ゴ」と呼ばれるどこか質素でも煌びやかな正装で仕事をしています。

休日にはDHI職員と、Jリーグの試合も出来るようなしっかり維持管理された人工芝の競技場で、何度かサッカーを楽しみました（写真9）。もちろん我々2名の日本人以外はすべてブータン人です。ティンパーの若者の間では、サッカーはかなりの



写真8 ブータンスタイルのティータイム



写真9 サッカーのメンバー

人気で、ヨーロッパや中南米のトップスター選手だけでなく、香川選手等も良く知っていました。タクシーの運転手は「元日本代表の中田選手がティンパーに来た」と話していました。

平日は仕事で極めて忙しい日々を送り、休日にはトレッキングは出来なかったものの、山並みを見ながらサッカーをし、夜には満天の星を見ながら「幸せな」現地調査に携わっていました。